

令和7年度版「学力向上ポータルフォリオ(学校版)」【蓮沼小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	国語では、漢字の定着や文構造の理解に課題があるため、前学年の学習内容を定期的に振り返る時間を設け、文章理解に必要な語彙や表現を整理し、日常的な文章活用の中で基礎的な定着を図る。算数では、計算技能や数値処理の正確さにばらつきがあるため、反復練習と個別支援を組み合わせる。また、文章での説明や単位数あたりの考え方を活用して課題解決する学習を取り入れ、基礎技能と応用力を向上させる。社会では、資料読解や用語理解を強化するため、授業内で実践的演習や確認テストを行い、資料活用の基礎技能の定着を図る。理科では、電気など「エネルギー」領域の概念理解を深めるため、日常生活と結び付けた実験や観察の機会を増やし、概念理解と用語定着を徹底する。
思考・判断・表現	国語では、文章の条件や目的に応じて情報を整理し、根拠を明確に自分の考えを表現する力を伸ばすため、条件設定を工夫した記述問題や文章演習を継続する。また、ICTやペア・グループ活動を活用し、多様な思考を広げる指導を進める。算数では、グラフや表から情報を読み取り、数量に関連付けて判断する力や、文章で理由を示して結論を導く力を育成するため、課題解決学習や説明演習を計画的に実施する。また、単位数あたりの考え方を活用した表現を定着させる演習も充実させる。社会では、資料に基づき因果関係や背景を考察する力を育成するため、資料読解と根拠提示の演習を授業内に組み込み、思考のプロセスを可視化して指導する。理科では、観察結果や実験結果を基に事象に関連付けて考察する力を育てるため、結果の整理や記録方法を示し、筋道を立てた結論の導き方を継続して指導する。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p><学習上の課題> 国語「読むこと」「書くこと」 算数「数と計算」「測定」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きいが、漢字や計算が苦手な児童が多い。個に応じた指導を充実し、反復練習や振り返りの時間を確保する必要がある。</p>	⇒ 授業の最初に、前の時間の振り返りの時間を確保し、その学習を生かして、本時の課題に取り組みることができるようにする。その時間に学習したことを振り返る時間も確保し、定着できるようにする。【毎時間】 「学年・学級の時間」を設け、書き込み式のドリルやノート、ドリルパーク等を活用し、漢字や計算の反復練習の時間を確保する。【週に1度】 1人1台端末を効果的に活用し、児童主体の授業を行い、成果と課題を共有する。【週に1度】
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 国語「読むこと」「書くこと」 算数「数と計算」「測定」「データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きいが、個に応じた指導の時間を確保し、指導を充実させていく必要がある。</p>	⇒ 特に「読むこと」「書くこと」や算数の授業において、主体的・対話的で深い学びを実現するために、学びのポイント「し・しゃ・く」を意識した授業を行う。【毎時間】 ICTを効果的に活用し、児童同士で考えを深めたり共有したりする場面を設定する。【毎時間】

全国学力・学習状況調査 <小6・中3> (4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	授業の初めに前時の学習を振り返る時間を設け、内容を整理して本時の課題に主体的に取り組めるよう工夫してきた。振り返りにより、学習の関連を意識して授業に臨む姿が見られ、理解の定着に効果があった。また、「学年・学級の時間」では、書き込み式ドリルやノート、ドリルパーク等を活用し、漢字や計算など基礎学習の反復練習を継続的に行ったことで、児童の基礎技能の定着が図られた。さらに、1人1台端末を活用した授業では、児童が自分で振り返り時間や確認テストの時間を確保し、解答や考えの過程を可視化することで、個々の理解度の把握や指導の改善につなげられた。授業内外での振り返りや自己評価を組み合わせ、学習内容の整理や定着に取り組むことも成果である。
思考・判断・表現	B	国語の「読むこと」「書くこと」や算数の「考える力」を育成するため、主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善に取り組んだ。学びのポイント「し・しゃ・く」を活用し、課題を自分事として捉える力や友達との意見交換を通じて多様な考えに気づく力が育ったことが成果である。授業ではICTを活用して意見が可視化し、児童同士が考えを比較・共有する場を設定することで、表現力や論理的思考力の向上にもつながった。また、課題解決型学習やペア・グループでの討議を通して、自分の考えを根拠とともに述べ他者の考えを受け止める態度も育成できた。さらに、授業後の振り返りや教師間の情報共有により課題や改善点を整理し、次時の指導に生かす循環を確立した。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語においては、「当該学年の前の学年別漢字配当表」に示されている漢字を文中で正しく使うことができる。]の正答率が昨年度よりも向上し、基礎的な漢字の定着が進んでいることが分かる。しかし、児童間の習熟度には差があり、十分定着していない児童もいるため、個々の理解度に応じた指導が今後も必要である。算数では、「データの活用」「測定」の分野での正答率が低く、昨年度の結果と同様の傾向であることから、学校全体の課題である。また「図形」の分野で正答率が低く、面積の求め方や図形の定義に関する理解が十分でないことが示されている。基礎的な計算力や概念理解の定着と、図形の特徴や関係性を多面的に捉える学習活動が求められる。理科では、「エネルギー」を柱とする領域で正答率が低く、特に電気や電磁石に関する理解が十分であることが明らかである。日常生活の事象と結び付けた学習を通して理解を深める指導が必要である。	
思考・判断・表現	国語では、「書くこと」「読むこと」においては、昨年度と大きな差は見られないが、問題の種類によって正答率に変動があることから、多様な文章や資料に臨める経験を増やすことが重要である。物語文・説明文・意図理解を要する文章など、異なる形式の文章に対応できる力を育てる必要がある。算数では、測定の分野の定着が十分でないことが顕著である。また、数量の関係が変化する場面を適切に捉え、問題解決に結び付ける力を高める指導が求められる。具体的な場面設定や図・表を活用した問題解決型学習を取り入れることが有効であると考えられる。理科では、「生命を柱とする領域」で正答率が低く、事象の理由を説明する力に課題が見られる。特に、原因と結果の関係を論理的に捉え、他の事象と比較しながら理解を深める力が十分に育っていないことが分かる。このため、実験や観察の結果をもとに考えを整理し、文章や図・表などで表現する学習を取り入れることが必要である。身近な生物や生活の事象を題材に理解を深める工夫も重要である。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、前学年までに配当された漢字を文中で正しく用いる設問において、市平均正答率を下回る学年が複数見られ、基礎的事項の定着に課題がある。また、主題と述語の関係を理解する設問においても一部で市平均を下回っており、文構造の理解を含めた基礎的な定着が必要である。算数では、市平均を上回る学年もあるものの、「数と計算」領域において基礎的な計算技能の定着に課題が見られる。計算の正確さや処理の確実性にばらつきがあり、継続的な指導が必要とされる。社会では、資料を基に基礎的事項を読み取る設問で正答率が伸び悩んでいる。用語理解と資料読解が十分に結びついていない状況が見られ、資料活用の基礎的な技能の育成が必要である。理科では、「エネルギー」を柱とする領域、特に電気に関する設問で正答率が低い傾向が見られる。用語や現象の意味理解が十分とはいえず、日常生活と関連付けた指導を通して概念形成を図る必要がある。	
思考・判断・表現	国語では、「読むこと」「書くこと」において市平均を下回る設問が見られる。文章の内容を的確に捉え、条件に応じて必要な情報を整理する力に課題がある。また、記述式問題では、本文を根拠として自分の考えを筋道立てて書く力が十分とはいえず、目的意識した読解と、根拠を明確にした記述の指導の充実が求められる。特に条件に沿って記述する力の育成が課題である。算数では、中学年の「測定」領域では成果が見られる一方、高学年の「データの活用」「変化と関係」に課題が見られる。グラフや表から情報を読み取り、数量に関連付けて判断する力に差がある。また、文章で説明する力や理由を明確に示す力にも課題が見られ、筋道を立てて結論を導く力の育成が求められる。単位数あたりの考え方を活用した説明の充実も重要となる。社会では、資料を基に理由や背景を考察する設問で正答率が伸び悩んでいる。資料から読み取った事実を根拠として活用し、因果関係を踏まえて考える力の育成が課題となっている。理科では、実験や観察の結果を基に事象に関連付けて考察する設問に課題が見られる。結果を整理し、筋道を立てて結論を導く指導の充実が求められる。	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	授業の初めに、前時の学習を振り返る時間を設け、内容を整理して本時の課題に主体的に取り組めるよう工夫してきた。振り返りにより、学習の関連を意識して授業に臨む姿が見られる。また、「学年・学級の時間」では、書き込み式のドリルやノート、ドリルパーク等を活用し、漢字や計算など基礎学習の反復練習を継続的に行った。短時間で集中する積み重ねにより、基礎学力の定着に効果が見られている。さらに、1人1台端末を活用し、児童主体の授業を進め、成果と課題を共有するようしている。ただし、学級間での実践の深まりには差があり、今後の課題である。	変更なし
思考・判断・表現	B	国語の「読むこと」「書くこと」や算数では、主体的・対話的で深い学びを実現するため、学びのポイント「し・しゃ・く」を意識した授業を行っている。課題を自分事として捉え、友達とのやりとりを通して多様な考えに気づく姿が増え、思考の広がりや表現の工夫がみられることは成果としてしている。また、ICTを活用して意見が可視化し、児童同士が考えを深める場を設定している。しかし、学級によって活用や主体性の程度に差があり、今後の指導工夫が課題である。	変更なし

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【蓮沼小・中・中等教育学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策	
知識・技能	全体的には、知識・技能の定着を見取ることができた。しかし、個人差は大きいことから個別に必要な支援を継続して行っていく必要がある。国語科の「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文中で正しく使うことができる。」では、結果が向上した学年もあるが、全学年での課題であると考え。算数科の「数と計算」において、学年関係なく課題が見られる。「学年・学級」の時間、ドリルパーク等を活用し、漢字学習の反復・習熟に取り組むだけでなく、文章内で意味を考えた活用ができるように授業改善を行う。さらに、他教科でも積極的に漢字を使用するなど方策を実施していく。また、計算練習においても、個々の課題を既習学年のどの系統から起因するものか確認しながら支援を実施していく。さらに、カリキュラム・マネジメントを実施しながら改善を図る。	
思考・判断・表現	活動の中に共同編集を位置付け、協動的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにすることで、「話すこと・聞くこと」の結果が向上した要因と考える。しかし、継続して学校全体としての課題であるため、様々な教科で、話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、授業改善を進めながら全学年で教科横断的・系統的に進める。「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。」で肯定的な回答の割合を維持する。	

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文中で正しく使うことができる。」 <指導上の課題> 児童が自らの学びを振り返る時間を確保しているが、児童の自己調整する方法をここに合わせて指導することが不十分である。	⇒ 「基礎定着」の時間を設け、児童の実態に合わせてドリルパークやスタディ・サプリ等を効果的に活用し、国語の基礎・基本となる語彙等の反復・習熟に取り組む。【2週間に1度】スタディログ等を使い個別に学習計画を立てる(見直す)時間を設定する。【月に1度】学習の振り返りを実施し、授業において、一人ひとりの児童に合う課題を設定したり、児童が主体的に課題を解決したりする場を設定する【毎授業で5分実施】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 「話すこと・聞くこと」が課題である。 <指導上の課題> 児童一人ひとりに合った自己表現する方法を教師が十分に評価し改善策を提案できていない。	⇒ 「話すこと・聞くこと」が課題であるため、様々な教科で、話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、活動の中に共同編集を位置付け、協動的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする。【R6年度さいたま市学習状況調査】「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。」の質問事項において【肯定的な回答の割合を90%以上】

⑤	評価(※)	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	「基礎定着」の時間や「学年・学級」の時間を活用し、児童の一人ひとりに合わせてドリルパークやスタディ・サプリ等を効果的に活用し、国語・算数を中心に反復・習熟に取り組むことができた。授業において、一人ひとりの児童に合う課題を設定したり、児童が主体的に課題を解決したりする場を設定するような授業改善を実施した。R6年度さいたま市学習状況調査において、「書くこと」において、向上が見られた学年もあったが、全体としては継続して課題である。
思考・判断・表現	B	各教科の活動の中に共同編集を位置付け、協動的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする授業改善を進めることができた。【R6年度さいたま市学習状況調査】「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。」の質問事項において【肯定的な回答の割合を5学年88%6学年92%】

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語科の「日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができるかどうかをみる」問題で課題がみられた。問題別解答類型をみると無解答率が高く読書に関しての有用性や効果等について実感していない、また読書の記録から読み取った内容を選ぶことができなかった児童が多いと考えられる。朝読書の活用、作者の記録からの読み取りを活用しながら、自分の考えや友達の考えを共有していく機会をより増やしていく。	
思考・判断・表現	算数科では、「データの活用」領域において、「示された情報を基に、表から必要な数値を読み取り式に表し、基準値を超えるかどうかを判断できるかどうかをみる」問題に課題があった。問題別解答類型をみると、基準値をこえる計算において間違いをしている傾向もみられた。「数と計算」を定着させるために、学習履歴の活用や個々の課題に合う、ドリルをアプリ等も活用しながら選り、基礎定着タイムで実施していく。	

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語科では、結果が向上している学年もあるが全体として、言葉の特徴や使い方に関する事項、「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文中で正しく使うことができる。」に課題がみられた。文中の中で意味を理解して書くことができていると考えられる。算数科では、数と計算に課題が見られる。基本的な計算、小数の計算等が正確にできていないと考えられる。	
思考・判断・表現	国語科の「話すこと・聞くこと」において、同集団比較においてR5年度の結果を上回る学年が増加した。教科横断的に話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、授業改善を実施してきた結果だと考えられる。しかし、全体的に正答率が低い傾向があるため継続して指導を続ける。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	「基礎定着」の時間や、授業の最後等に児童自身がドリルパークやスタディ・サプリ等を活用し、自身の課題に取り組む習慣ができた。スタディログ等やスクールタッチボードを活用し、学習計画の見直しや授業改善に取り組む機会が不足していた。児童が主体的に課題を解決したりする場を設定することが増えた。	児童の学習計画の見直しのための時間を意図的に設定する。教師が、スタディログを確認する時間を設定する。
思考・判断・表現	B	活動の中に共同編集を位置付け、協動的な学びを通して考えたり、表現するために教育支援ソフトを活用して授業を実施することができた。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)